

岡野昇一先生記念号によせて

岡野昇一先生は、1949年に立教大学経済学部経済学科を卒業され、同年、本学助手となりました。以後、講師、助教授、教授を経て、1990年3月に定年で退職されるまで、実に40年の長きにわたって経済学部で教育と研究にあたってこられました。この間、学部ならびに大学院で「協同組合論」を担当され、多くの学生、大学院生を指導され、本学ならびに経済学部の発展のため貢献されました。

先生は、研究の出発点を、日本の近代化のための経済政策の追求におかれしました。先生は、第2次大戦後の日本社会の混乱の主要な原因が前近代的な経済構造にあると認識され、処女論文「農村共同体と農家経営—長野県下農村調査のひとつこま—」で説明されておられるように、農村での実態調査にもとづかれながら、近代化の第一歩には、農村の経済構造ならびに農民の意識の変革が必要であり、その変革のための政策の追求こそが経済政策研究の根本的な課題であるとされました。それは具体的には、農地改革を経たとはいえ、なお零細農地制が存続した日本農業が、本格的な農業として、近代的な発展を実現するためには、社会制度的な側面において大農地制の形成が必要であり、さらに、そのための耕地整理、農地交換分合が農業技術的に必要であると認識され、その条件の追求に第一の研究課題をおかれしました。先生の御論稿「議会総画と小土地所有に関する覚書」は、イギリス第2次エンクロウジヤ運動の研究を通じ、比較史的な方法に立脚されながら、上記の課題を追求されたものであります。

さらに、先生は、日本の近代化のためには、農民の意識の変革が必要であると認識され、農民の個別的意識を協同の意識へと変革する方策の研究を、重要な研究課題として設定されました。すなわち、多数の孤立した自作農民が、近代的農業の確立を目指し、それを実現するためには、農業経営の零細制が止揚されなければなりません。それには、協同の経営、協同の意識が必要とされます。しかし、日本には、共同体的な協同意識は伝統的に存在するものの、協同の意識である、地域の個別農民が自発的、自覚的に協同する横の連帯意識には欠けていると考えられます。先生は、その自覚的な協同の意識を農民のなかにつくりだしていくためには、いかなる条件、環境、基盤が必要なのか、また、日本の協同組合の制度的運動は果たしてそうした要請に応えることができるものなのか、さらに、その運動に、いかなる政策と方向が必要なのか、といったことの追求を研究のもうひとつの課題とされました。

共同の御労作である『協同組合論』（文真堂，1976年）は，こうした研究課題を解明することに焦点をあてられたものであります。

以上の諸課題に関する先生の御研究は，第2次大戦後の日本経済の再建，経済の高度成長，産業構造の高度化という時代の急激な変化，それにともなう日本の農業と農村の急激な変容の時期にすすめられました。その急激な経済社会の変化にともなう研究上の困難な状況にもかかわらず，先生は実態把握と理論研究の統一，実態の科学的把握の可能な理論の構築，さらには，日本の真の近代化のための政策体系の確立といったものを目的として，着実に研究を進められ，多くの学問的成果をあげてられました。

先生の学会における活動もまた顕著であります。先生は，日本経済政策学会の幹事を長い間つとめられ，とくに1971年以降は同学会の理事に就任され，学会の発展のために，多くの貢献をされました。このように先生は，本学経済学部教授として研究，教育の両面において，本学ならびに経済学部の発展のため，また，学会の発展のためにも，多大の貢献をされてられました。

先生の教育熱心なことはよく知られております。先生はつねに学生の問題意識を高めるために努力され，新しい教授法を積極的に実践されてられました。このように，40年余，倦むことなく続けてこられた先生の教育的営為は，わが経済学部のみならず，こんごも生き続けていくことでありましよう。

また，岡野先生は碩学でもあります。しかし，先生はいつも謙虚な態度で，私共のどんな稚拙な質問にたいしても，ひとつひとつ丁寧に，ある時はユーモアを交えて納得のいくまで教えて下さるのがつねでありました。

立教大学は，先生の学術上，教育上の功績の顕著なことにより，1990年6月，先生に名誉教授の称号を贈りました。

先生はいま，定年退職を迎えられましたが，経済学部の発展に尽されました先生の御功績を永くとどめるため，本号を先生の記念号といたします。

先生のこんごの御健康と御活躍を祈念すると同時に，これまでと変わぬ御助力を本学と経済学部のために賜われますよう願ってやみません。

1991年1月

経済学部長 丸山 恵也